

書肆えん通信

No.5

2017・08・09
書肆えん
秋田市新屋松美町
5-6

わたしだけの詩を……………矢代 レイ 1

わたしだけの詩を

矢代 レイ

衝撃

リバーサイドホテル

山本かずこ

ちよつと休んでいかないか

とあなたは言った

まるで

休みたいと思ったとき

ちようど

リバーサイドホテルがあつたように

自然な口調で

あなたは私を誘った

いや？

(いやではないけれど)

リバーサイドホテルはいけないわ)

そんなこと

言えないから

今日はいやだと私は言った

リバーサイドホテルには

つい昨日

やってきたばかりだ

これは、山本かずこの詩集『リバーサイドホテル』の冒頭詩である。この詩を読んだとき、こんなにもすぐに性を表現できる詩の世界があるのかと、衝撃をうけた。これまでで出会う機会のなかった、詩である。

唇

谷川俊太郎

笑いながら出来るなんて知らなかった

とあなたは言う

唇はとても忙しい

乳房と腿のあいだを行ったり来たり

その合間に言葉を発したりもするのだから

谷川俊太郎の詩集『女に』、絵は佐野洋子。

自由詩といえども、ここまで性を解放させた詩を見たのは、初めてだった。愛と性の言葉が、草原を渡る風によってでんぐり返しをしているような気分になったのを記憶している。

それからのわたしは、野放図に広がる精神のバリアーフリーを楽しむかのように、自由に詩作を試みるようになった。そして、それらの作品をためらうことなく、さきがけ詩壇などに投稿しはじめたのだ。選者は驚いたにちがいない。この湧き上がってくる気持ちは抑えるのは無理に近かった。無論のこと、掲載は望むべくもなく、ただ投稿することだけが唯一の目的で

2

あった。

わたしはいつしか決まった約束事で書くことに、出口をふさがれたような息苦しさを覚えるようになっていた。9号の既製品の服ばかりでなく、オーダーメイドの服も着てみたい……との思いは日増しに強くなっていったのである。

『ピッタインダウン』創刊

詩の空を自由に羽ばたきたい——との、やむにやまれぬ思いに、意を決して、さきがけ詩壇を卒業させていただくことにした。新たに、個人詩誌『ピッタインダウン』を創刊し、発表の場とした。字数も行数もすべて自由。当然ながら、ひとりりで発行するには責任がともなう。それなののである——。

なにかこうもわたしを詩作にかりたてるのか。焦り？ 恐さ？ いやいや、苦しむことの深層にひそむ喜びである。難儀さよりも、面白さのほうが大きい。苦しむほどに、やり遂げる満足感で充足している。

《苦しみを通して人間は成長するのだ。

苦しみを自分の成長の糧とする人間は、人生に於

ける本当の勇者である。》

ふと、この言葉を思いだした。中学のころに出会って以来、ずっとわたしの傍にありつづけている言葉。決して平坦とは言いがたい人生の坂にも、いまは穏やかに木洩れ日がゆれている。

困 惑

ある日、〈女の壁を感じる?〉と、ふいにある方から尋ねられたことがあった。とっさにわたしは、〈あら!〉と、答えていた。

わたしは六十代半ばの、ごく普通の女性。すこぶる旺盛な創作力と詩への情熱が、わたしを詩作へとかりたてている。新しい発見や感動に出会うと、むき出しの感情をそのままになんでも書いてしまう。それ故にか、作品を発表後、否応なしに不穏な気配を感知することがある。いちど手元から飛び立った詩は、勝手に思わぬ方向にひとり歩きする。当然ながら、読者はあらゆる読み方をする。ところが、である。短絡的に作中の人物を、作者と勘違いして読みとる人がいるのも否定できない事実なのだ。えてして人は、自分の範ちゆ

うにないものには目をそらすか、価値を認めない傾向にあることが多いように思われる。

小心者のわたしは、他人の目が気になるらしい。多分のはじらいを隅に追いやっているのが現状である。つまり、これが目に見えない〈女性ゆえの壁?〉ではないか、きつと。

世のなかには、性に関する詩は徹底的にきらい、という人は数多くいる。いっぽうで、好きという人も少なくはないのでは——。ところで、わたしは、そのどちらでもない。ようするに、わたしは性に限らず、イマジネーションのある詩にひかれる。楽しいからだ。主体的な行動がわたしを強くし、絶えず外へ向かわせている、といえる。

いま、わたしの詩は、おのずと変わってきているように感じる。いろんな詩形にあこがれ、これまでとは違うアプローチを試みている。

たとえば目の前に、赤、白、黒、紫、中間色、寒色系、暖色系……と、いろんな絵の具があるとする。自分の意思で、選択が可能。何色を選んだとしても自由人により、好みは千差万別。だから、少なからず惑わすものの気配を感じても、わたしはおもねることなく、この姿勢を変えることはないだろう。詩は対他では

なく対目である、と常々思っているから。天性に欠けている分、生来の粘り強さで前へ進んでいくしかない。自分に合うものを見つけるために――。結局はいい詩を書いて、楽しめばいいのだ、と考える。

水のように

わたしはよく、水をテーマにした詩を書く。

半世紀以上も前にさかのぼるが、わたしはずっと同じ場面の夢を見てきた。見せられてきた、と言ったほうが当たっている。登場人物は、火の見やぐらのでっぺんにしがみついているわたしと、逆巻く波の間から巨大な姿をみせる赤と緑の二頭の竜。六年前のあの東日本大震災の光景に酷似している。同じ場面を、すべてカラーで見せられつづけてきた。

わたしは、「水を生ける」を書いている。

水を生ける

だ円の サファイア色の

陶器の水盤に

水を生ける

なめらかで甘い 一本の
くねった白い水を

中央に生ける

その横に

こわばった顔の青い水を

斜めに挿す

麻糸のように細く

はんなりした水をちりばめる

やわらかな感覚で

自由に水を生けていく

とくに思弁性の強い水の花々が

ことさらな色彩で

姿をあらわした

盛られた花々は

光と陰との迅速な変化に

ふくれあがり

巨大な竜の姿が

鮮明に浮きあがった

紅蓮ぐんれんの炎のように燃える空に

赤と緑の輪郭をもった二頭の
綱のように波打つ髭が

大きくうねったとき

竜は

天の門をめざして

重く垂れさがった天蓋を破り

昇っていった

水盤の水鏡には

竜灯のような光彩をはなつ

白銀色の鱗片が 数枚

煌々と輝いていた

この作品さながらに、夢のなかに出現する竜。が、しかし、その絶望的な夢がぶつくりと消えた。ようするに、十五年前の事故を境にして……夢を見なくなつたのだ。生かされたのには、それなりの意味があるはず。実家に竜の掛け軸がないか、竜にまつわる話はないか、などと親に聞いてみたりもしたが分からなかつた。

ある日、日光輪王寺薬師堂の鳴き竜を見た。そのとき、これだ！ と思つた。わたしの魂が、ぞくつとす

るくらい熱くなつたのだ。とっさに、わたしは守られている！ と確信した。

これを契機に、水を強く意識するようになった。夢そのものを素直に受け入れて、有限なこの時間を大切にしよう、いまできることは迷わずやろう、と心にたく誓つた。

とうとうと流れる水のように、あるときは、しぶきをあげて流れ落ちる水のように、またあるときは、こんこんと湧き出る水のように、わたしは澄んだ水でありたい。みずからの意志を貫く水になりたいと思うようになったのである。

「ピッタの会」設立

詩を身近におき、わずかではあるが詩の魂に触れたとき、詩の新しい景色を見たいと願うようになった。詩の知識に飢えているわたしは、詩を勉強したいと強く思うようになり、その気持ちを止められなくなつてしまった。

ちようと、詩人協会に入れていただいた時期も同じであつた。休火山がいきなり噴火したような、学びたい病。詩はひとりて学ぶべきものだが、わたしと同

詩への想い

ただひたすらに学びたい欲求と、ただひたすらに書きたい欲求との平衡を保つのは容易でない。暗闇のなかから言葉をひろいあつめ、質的充実をはかる。

自分を救ってくれた詩に、わたしにしか書けない詩で応えたい。わたしの詩を生みだしたい。うまい詩ではなくても、強い意志がある詩を、である。

〈詩とはなにか〉との問いに、まだ答えられないわたしが、詩は本質的に精神の満足を自覚させ得るもの、とだけはいえる。

いくつになっても学べることは、屈託ない幸せなことである。

いまここに詩があるから、わたしがいる。いつも光を内につつんでいる、矢代レイでありたい。

詩の地平は開けるか！ その道のりは果てしなく、遠い。



人たち」。参加者は八名であった。

これからも、開かれた詩の扉の、そのまた向こうの扉にある、詩の世界をのぞいて見たいものである。

「ピッタの会」は、詩を愛する人たちの、ポエムガールデンとしたい。

じように考えている人がいるのではないか。黙っていたのでは、なにも始まらない！ そこで思い切って、行動に移すことにした。

四月十一日、あきた文学資料館において、「第一回ピッタの会」を開催した。

講師は前田勉氏。講話は「詩と詩

【後記】

保坂英世詩集・保坂若子画集『かがり火』が第十八回秋田県現代詩人賞（詩集賞）、寺田和子詩集『七時雨』が一七年度秋田市文化選奨（文芸部門）に選ばれた。おめでとうございます。

秋田県現代詩人賞については、「秋田県現代詩人協会会報」第五十六号の選評が詳しいので、ここでは前田勉氏のホームページ「窓枠大の空」から、『かがり火』を紹介する。

《保坂英世詩集・保坂若子画集（2016.06.02）

詩を書く夫と絵を描く妻、二人で一冊を編んでいる珍しい作品集だ。

Ⅱでは、秋田県羽後町生まれの若子氏が描く西馬音内盆踊りの、妖艶な踊り手の姿と記憶が重なる絵抒情溢れる世界に創り上げていく英世氏の言葉による描写。それぞれが重なっているようでもあり、それぞれがそれぞれに位置している独立した世界でもある。

5部構成39編。次の作品はⅢに収められているもの。

「茜屋珈琲店」

硝子を十の字に仕切ったドアから／何とはなしに歩く人を見ている／時はゆっくりと過ぎていくのに／この昼下がり／急ぎ足で通る 人 人／その姿が少し歪んで見えるのはなぜだろう（略）／時代は饒舌な足音を残し 消えてゆく／時代は寡黙のままどこへ走り去ったか／青い空に雲ひとつ／斜めによぎる鳥／漂流する難破船／時代はどこへ走り去ったか／人には／ときに暗さが必要だ／それは何億年も前から細胞に組み込まれたもの／見たまえ／マスクターの黒い服は／落ち着いた色調の店内に溶けこんでいるだろう／暗闇のなかから目を光らせて時代を読み解く／（以下略）

秋田駅前にある珈琲店。英世氏が書いている「茜屋珈琲店」は現在地へ移転する前の情景なのかは分からないが、こんなに身近な情景を舞台にすることが出来るというのはいくらやましい。詩を書く一人と

して、この「茜屋珈琲店」に身を置いて社会を時代を自分を私は書ける（描ける）のだろうか。ふと、そう思った。この作品に潜んでいる奥行きのある思惟を出す作業は、私には無理かもしれない。

『言葉を使うことができる人』がまた一人その形を現した。喜ばしい。』

また、『七時雨』の秋田市文化選奨の選評を紹介する。

『本作品は、作者の確固たる詩的哲学をもとに制作された、短編31編からなる詩集で、収録された詩の数々は瑞々しい感性にあふれています。その独自の感性によって表現される詩の世界は、誰にとっても親しみやすく、読んでいくうちに、心の癒やしを得ることができる作品となっています。』

コンパクトな構成の中にドラマがあり、どの詩を読んでも、最後の1、2行が非常に印象的であると高く評価されました。』

もう一つ、矢代レイ氏の「ピットインダウン」について、前田勉氏のホームページより。

《祝 創刊2周年『ピットインダウン』（2017-05-07）

矢代レイさんの個人詩誌『ピットインダウン』の第9号が、5月1日付で発行された。

同誌創刊号が発刊されたのは2015年4月30日。そこから2年、創刊2周年である。単純計算すると約3ヶ月に1回の発行となる。個人誌であるが故の苦しさもあろう。一人であるがために、複数の作品を表出しなければならぬ辛さや編集方針、号を重ねるごとに求められる作者⇨詩人⇨編集者としての企画力など、など……。

詩を書くことの延長として、その一人の在り方という事を経験できる次元へ踏み入ってしまったからには、おいそれと号を絶やすことは出来ない、はず……。（プレッシャーかけすぎたかな？）

矢代レイ氏は、プレッシャーをよき肥やしとして、さらに飛躍することでしょう。

この次は、どんなイマジネイティブな詩を書かれるやら。

（丁）